

20. 2. 2004

日 本 国 特 許 庁
JAPAN PATENT OFFICE

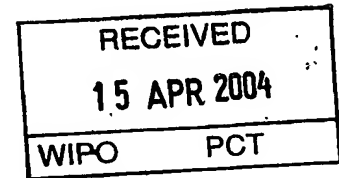
別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出 願 年 月 日
Date of Application: 2003年 1月17日

出 願 番 号
Application Number: 特願2003-010198
[ST. 10/C]: [JP 2003-010198]

出 願 人
Applicant(s): 森 有一
メビオール株式会社



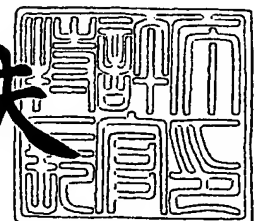
BEST AVAILABLE COPY

PRIORITY DOCUMENT
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN
COMPLIANCE WITH
RULE 17.1(a) OR (b)

2004年 4月 1日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

今井康夫



【書類名】 特許願

【整理番号】 1025240

【提出日】 平成15年 1月17日

【あて先】 特許庁長官 太田 信一郎 殿

【国際特許分類】 A01G 31/00

【発明の名称】 植物栽培用器具および植物栽培方法

【請求項の数】 7

【発明者】

 【住所又は居所】 神奈川県横浜市栄区鍛冶ヶ谷 2 - 5 - 1

 【氏名】 岡本 昭弘

【発明者】

 【住所又は居所】 山梨県塩山市熊野 2 7 4 株式会社向山蘭園内

 【氏名】 窪田 眞紀子

【発明者】

 【住所又は居所】 神奈川県横浜市金沢区釜利谷南 3 - 2 1 - 2 - 4

 【氏名】 森 有一

【特許出願人】

 【識別番号】 395024506

 【氏名又は名称】 森 有一

【特許出願人】

 【識別番号】 596009814

 【氏名又は名称】 メビオール株式会社

【代理人】

 【識別番号】 100077517

 【弁理士】

 【氏名又は名称】 石田 敬

 【電話番号】 03-5470-1900

【選任した代理人】

【識別番号】 100092624

【弁理士】

【氏名又は名称】 鶴田 準一

【選任した代理人】

【識別番号】 100089901

【弁理士】

【氏名又は名称】 吉井 一男

【選任した代理人】

【識別番号】 100082898

【弁理士】

【氏名又は名称】 西山 雅也

【選任した代理人】

【識別番号】 100081330

【弁理士】

【氏名又は名称】 樋口 外治

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 036135

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 0002344

【包括委任状番号】 9911232

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 植物栽培用器具および植物栽培方法

【特許請求の範囲】

【請求項1】 栽培すべき植物体を収容可能な形状を有する器具であって；その少なくとも一部に、該植物体の根と実質的に一体化し得るフィルムを有することを特徴とする植物栽培用器具。

【請求項2】 前記フィルムが、該フィルムを介して水と塩水とを対向して接触させた際に、測定開始後4日目（96時間）の水／塩水の電気伝導度（EC）の差が4.5 dS/m以下のフィルムである請求項1に記載の植物栽培用器具。

【請求項3】 前記フィルムが、該フィルムを介して水とグルコース溶液とを対向して接触させた際に、測定開始後3日目（72時間）の水／グルコース溶液の濃度（Brix %）の差が4以下のフィルムである請求項1または2に記載の植物栽培用器具。

【請求項4】 前記フィルムが、該フィルム内に植物体を配置して栽培を開始した35日後に、前記植物体の根に対して10g以上の剥離強度を示すフィルムである請求項1～3のいずれかに記載の植物栽培用器具。

【請求項5】 前記フィルムが、耐水圧として10cm以上の水不透性を有する請求項1～4のいずれかに記載の植物栽培用器具。

【請求項6】 植物体と、該植物体の根と実質的に一体化したフィルムとを少なくとも有することを特徴とする植物－フィルムの複合体。

【請求項7】 植物体を収容可能な形状を有する器具であって；その少なくとも一部に、該植物体の根と実質的に一体化し得るフィルムを有することを特徴とする植物栽培用器具を用い；

該容器中に植物保持用支持体および植物体を配置し、肥料成分あるいは生理活性物質を有する水を、少なくとも前記フィルムを介して接触させつつ、前記植物体を栽培することを特徴とする植物栽培方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は植物栽培用器具、植物－フィルム複合体、および植物栽培方法に関する。より詳しくは、本発明は、植物の根と実質的に一体化できるフィルムを有する植物栽培用器具；植物体と、該植物体の根と実質的に一体化したフィルムとを有する植物－フィルム複合体；および該植物栽培用器具を用いた植物栽培方法に関する。

【0002】

本発明によれば植物体に対する酸素供給と、水および肥料成分の供給とを好適に機能分離することが可能となるため、例えば、養液栽培の基本となる植物の根と養液が直接接することにより生ずる多くの問題、すなわち根に対する酸素の供給、養液の精密な管理、根からの養液の汚染あるいは養液から植物への病原菌汚染等、多くの問題を解消することができる。更に、本発明の植物栽培用器具を用いることにより、栽培すべき植物を水分抑制状態として、該植物を高品質化することが容易になる。更に、本発明の植物栽培用器具を用いることにより、培養液からの植物への病原菌汚染が防止できるために、有糖培養、すなわち、クローン苗の組織培養を行うことが可能になる。

【0003】**【従来の技術】**

従来より、伝統的に種々の植物が露地（ろじ）栽培により、すなわち、太陽や土などの自然の恵みを利用して、屋外で栽培されて来た。これに対して、近年、施設栽培、すなわち、ガラスやビニールフィルム等で覆われた温室あるいはハウスの中で植物を栽培する方法も盛んに行われるようになって来た。このような施設栽培においては、露地栽培よりも自然条件に左右されにくいため、種々の植物（例えば蔬菜類）を安定して作ることが可能となるという利点がある。

【0004】

1999年の統計によれば、蔬菜類の施設栽培の総面積は11万2822haに増加しており、蔬菜の端境期をなくし、種々の蔬菜を年間通じて供給可能とした点で、露地栽培によるものに比べて、栄養的に劣るという批判もあるものの施設栽培の功績は大きい。

【0005】

植物の施設栽培において、露地栽培における連作障害の回避や栽培不適地での栽培が可能であること、露地栽培に比べると労働時間の短縮につながることや、単位面積当たりの収量増加、工業的生産の可能性等の観点から、温室中の設備を用いて、土を使わずに植物を保持し、且つ養分や水を与えて植物を栽培する、いわゆる養液栽培（一般には「水耕栽培」と称される場合が多い）が導入され始めた。この養液栽培においては、土を使った栽培に比べて、連作障害がなく（特に、燻蒸に使用する臭化メチルの全面使用禁止を控えて、この利点は大きい）、一般的に成長が早く収量が多い、栽培環境の調節が比較的容易である等の利点がある。

【0006】

しかしながら、1999年における養液栽培の面積は1056haであって、蔬菜施設栽培総面積の約1%にすぎない。このように養液栽培が盛んとはならない大きな理由としては、初期資本投資が大きく、生産コストが上昇しリスクが大きいことや、管理に相当な技術を要する、栽培に一度失敗すると（病原菌の侵入や養液の調整等）壊滅的被害が出ること等が障害になることが挙げられる。

【0007】

養液栽培の種類は、噴霧耕、水耕（たん液式、NFT）、固形培地（砂耕、れき耕、ロックウール耕）の3種類あり、それぞれの方式には利点、欠点を有する（これらの各方式の詳細、利害得失、等に関しては、例えば文献「養液栽培の新マニュアル」編者：（社）日本施設園芸協会、発行所：（株）誠文堂新光社、発行：2002年7月を参照することができる）。

【0008】

上記した各方式の養液栽培システムに共通する最も重要なポイントないし弱点は、初期導入コスト、ランニングコスト、および酸素の供給である。更には、養液栽培では根と養液が直接接触することから、養液の調整がデリケートであり、その管理範囲が非常に狭いことが問題となる。特に、養液の組成、濃度、pHの変化には細心の注意が必要とされている。中でも、養液栽培で最も問題となる点の1つは、養液のpHが容易に変化することである。

【0009】

また、植物に対する酸素の供給も、最も重要な条件である。特に、高温時には根の呼吸が高まって酸素要求量が増すが、一方で溶存酸素濃度は低くなるので、酸素欠乏の問題がある。酸素不足が発生すると「根づまり」と称される現象が生じ、その結果、根が腐敗し、アンモニアが発生し、養液のpHが上昇し始める。根への酸素の供給は養液栽培では液中の溶存酸素によるか、直接空気中の酸素に接することによって補うことができるが、一般的に養液栽培においては、そのシステム構成上、養液中の溶存酸素を使用せざるを得ない場合が多い。しかしながら、その性質上、溶存酸素の濃度自体を上昇させることは不可能であるため、実際には、養液栽培においては、植物への酸素の供給が不十分となることが極めて多い。

【0010】

加えて、従来の養液栽培においては、病原菌の感染防止が極めて重大な問題である場合が極めて多い。これを防止するための種々の工夫が試みられている。農薬の投与が考えられるが、農薬登録上、培養液中に農薬を添加することが出来ないで、農薬によらない殺菌方法が、種々考えられている。例えば、紫外線、オゾンや熱による殺菌、ろ過による病原菌の除去、銀等の金属イオンの添加による殺菌、拮抗微生物の添加等がある。しかしながら、いずれも付帯設備の設置や管理によるコストアップが問題になり、更には、植物体にダメージを与えたり、養液中の有効成分を分解する等の新たな問題を生じ、未だに決定的な感染防止の効果は得られていない。

【0011】

【非特許文献1】

「養液栽培の新マニュアル」編者：(社)日本施設園芸協会、(株)誠文堂新光社、2002年7月発行

【0012】

【発明が解決しようとする課題】

本発明の目的は、上記した従来技術の欠点を解消した植物栽培用器具、植物フィルムとの複合体、および植物栽培方法を提供することにある。

【0013】

本発明の他の目的は、根に対する酸素供給と、水および肥料成分供給との両方ともを好適に行うことを可能とする植物栽培用器具、植物－フィルムの複合体、および植物栽培方法を提供することにある。

【0014】

本発明の他の目的は、植物の病原菌による感染の危険性を極めて抑制した植物栽培用器具、植物－フィルムの複合体、および植物栽培方法を提供することにある。

【0015】

【課題を解決するための手段】

本発明者らは鋭意研究の結果、フィルム（例えば高分子製フィルム）が、植物の根と実質的に一体化するという全く新たな現象を見出した。

【0016】

本発明者らは、このような知見に基づいて更に研究を進めた結果、フィルムと実質的に一体化した植物の根が、フィルムを介して、溶液中の肥料成分および水を植物の成長に必要な程度、吸収する現象をも見出した。

【0017】

本発明の植物栽培用器具は上記知見に基づくものであり、より詳しくは、栽培すべき植物体を収容可能な形状を有する器具であって；その少なくとも一部に、該植物体の根と実質的に一体化しうるフィルムを有することを特徴とするものである。

【0018】

本発明によれば更に、植物体と、該植物体の根と実質的に一体化したフィルムとを少なくとも有する植物－フィルムの複合体が提供される。

【0019】

本発明によれば更に、植物体を収容可能な形状を有する器具であって；その少なくとも一部に、該植物体の根と実質的に一体化しうるフィルムを有することを特徴とする植物栽培用器具を用い；該容器中に植物保持用支持体および植物体を配置し；肥料成分を含有する水を、少なくとも前記フィルムを介して接触させつ

つ、前記植物体を栽培する植物栽培方法が提供される。

【0020】

上記構成を有する本発明の植物栽培用器具においては、植物の根と養液（肥料成分を含む液体）とが直接には接触してはいない。換言すれば、植物体に対する酸素供給と、水および肥料成分の供給とが好適に機能分離された状態にある。このため、本発明においては、植物が空気中の酸素を有効に利用することができ、従来の養液栽培の問題（すなわち、植物の根と養液が直接に接することにより生ずる多くの問題）であったところの、根に対する酸素の供給、養液の精密な管理、根からの養液の汚染あるいは養液から植物への病原菌汚染等の問題を容易に解消することができる。更に、本発明の植物栽培用器具を用いることにより、栽培すべき植物を水分抑制状態とすることが極めて容易となり、該植物を高品質化することができる。

【0021】

【発明の実施の形態】

以下、必要に応じて図面を参照しつつ本発明を更に具体的に説明する。以下の記載において量比を表す「部」および「%」は、特に断らない限り質量基準とする。

（植物栽培用器具）

本発明の植物栽培用器具は、植物体を収容可能な形状を有する器具であって；その少なくとも一部に、該植物体の根と実質的に一体化し得るフィルムを有する器具である。

【0022】

該器具の基本的な一態様を示す図1を参照して、この態様の植物栽培用器具1は、植物体を収容するための収容部2を与える（画する）ための壁材3と、該壁材3が画する収容部2の底部に対応する位置（植物体の根が接触すべき部分）の少なくとも一部に配置されたフィルム4とを含む。該フィルム4は、植物体の根と実質的に一体化し得る性質を有する。

【0023】

図1においては、収容部2の底部全域にフィルム4を配置しているが、本発明

においては、該底部の少なくとも一部に、フィルム 4 が配置されていれば足りる。また、器具 1 の強度、フィルム 4 の補強等の観点から、他の材料（例えば、壁材 3 と同じ材料）で、フィルム 4 を適当な数に分割してもよい。この場合には、例えば、障子の「さん」と同様の内枠（形状は、格子状、放射状、同心円等、任意である）を設けて、フィルム 4 を適当な数に分割することができる。

【0024】

また、必要に応じて（強度、植物体保持等の条件が満たされる限り）、壁材 3 を含めた器具 1 の全体をフィルム 4 ないしは該フィルム 4 と同様の材料（ただし、厚さは適宜調節する）で構成してもよい。即ち、従来より使用されてきたような公知の植物栽培用容器（例えば、ポット状、トレイ状、プランター状）の全ての部分を、フィルム 4 ないしは該フィルム 4 と同様の材料で構成することも可能である。

【0025】

フィルム 4 と壁材 3 とは一体的に成形してもよく、また接着剤や物理的固定手段等の接着・固定手段を用いて、相互に固定してもよい。

【0026】

上記構成を有する植物栽培用器具 1 は、例えばこの図 1 に示すように、溶液容器 5 内に配置された溶液 6 に、少なくとも収容部 2 の底面（この場合にはフィルム 4）が接触するようにして、溶液 6 と接触させることができる。

（他の態様）

図 2 は、本発明の植物栽培用器具 1 の他の態様を示す模式断面図である。図 2 を参照して、この態様においては、植物体収容部 2 を画する機能を有する有孔の壁材 3（例えば、「ざる」状の形状を有する壁材 3）の内側（植物体を配置すべき側）に、植物体の根と実質的に一体化し得る性質を有するフィルム 4 が全面的に配置されている以外は図 1 の態様と同様である。

（フィルム）

本発明において、植物栽培用器具 1 を構成するフィルム 4 は、「植物体の根と実質的に一体化し得る」であることが特徴である。本発明において「植物体の根と実質的に一体化」できるか否かは、例えば、後述する「一体化試験」によって

判断できる。本発明者らの知見によれば、「植物体の根と実質的に一体化し得る」フィルム4としては、以下のような水分透過性／イオン透過性のバランスを有するフィルムが好ましいことが見出されている。本発明者らの知見によれば、このような水分／イオン透過性のバランスを有するフィルムにおいては、栽培すべき植物の成長（特に、根の成長）に好適な水分／養分透過性のバランスが容易に実現できるため、根と実質的に一体化が可能となると推定される。本発明において、植物はフィルムを通して肥料をイオンとして吸収するが、このような使用するフィルムの塩類（イオン）透過性が、植物に与えられる肥料成分の量に影響すると推定される。該フィルムを介して水と塩水を対向して接触させた際に、下記に示す測定開始4日後の水／塩水の電気伝導度（EC）の差が4.5 dS/m以下のイオン透過性を有するフィルムが好適に用いられる。このようなフィルムを用いた際には、根に対する好適な水あるいは肥料溶液を供給し、該フィルムと根との一体化を促進することが容易となる。

【0027】

このフィルムは、耐水圧として10 cm以上の水不透性を有することが好ましい。このようなフィルムを用いた際には、根に対する好適な酸素供給および該フィルムを介しての病原菌汚染を防止することが容易となる。

（耐水圧）

耐水圧はJIS L1092（B法）に準じた方法によって測定することができる。本発明のフィルムの耐水圧としては10 cm以上、好ましくは20 cm以上、より好ましくは30 cm以上である。

（水分／イオン透過性）

本発明においては、上記フィルム4は、該フィルムを介して水と塩水（0.5質量％）とを対向して接触させた際に、測定開始4日後の水／塩水の電気伝導度（EC）の差が4.5 dS/m以下であることが好ましい。この電気伝導度の差は、更には3.5 dS/m以下であることが好ましい。特に、2.0 dS/m以下であることが好ましい。この電気伝導度の差は、以下のようにして測定することが好ましい。

<実験器具等>

なお、本明細書の以降の部分（実施例も含む）において用いた実験器具、装置および材料は、（特に指定がない限り）後述する「実施例」の前の部分に示した通りである。

<電気伝導度の測定方法>

肥料は、通常イオンの形で吸収されるため、液中に溶けている塩類（あるいはイオン）量を把握することが望ましい。このイオン濃度を測定する手段として電気伝導度（EC、イーシー）を用いる。ECは比導電率ともいい、断面積 1 cm^2 の電極 2 枚を 1 cm の距離に離れたときの電気伝導度の値を使用する。単位はシーメンス（S）が使われ、 S/cm となるが肥料養液の EC は小さいので、 $1/1000$ の mS/cm を使う（国際単位系では dS/m （d はデシ）と表示する）。

【0028】

実際の測定においては、上記した電気伝導度の測定部位（センサー部）にスポイトを用いて試料（例えば溶液）を少量乗せ、導電率を測定する。

<フィルムの塩／水の透過試験>

市販の食塩（例えば、後述する「伯方の塩」） 10 g を水 2000 ml に溶解して、 0.5% 塩水を作製する（EC：約 9 dS/m ）。

【0029】

図 3 を参照して、上記「ざるボウルセット」を使い、ざる上に試験すべきフィルム（サイズ： $200\sim260\times200\sim260\text{ mm}$ ）を乗せ、該フィルム上に水 150 g を加える。他方、ボウル側に上記の塩水 150 g を加え、得られた系全体を食品用ラップ（ポリ塩化ビニリデンフィルム、商品名：サランラップ、旭化成社製）で包んで、水分の蒸発を防ぐ。この状態で、常温で放置して、 24 hrs 毎に水側、塩水側の EC を測定する。

【0030】

本発明においては、フィルムを介する植物の根の養分（有機物）吸収を容易とする点からは、上記フィルムは、所定のグルコース透過性を示すことが好ましい。このグルコース透過性は、下記の水／グルコース溶液の透過試験により好適に評価できる。本発明においては、上記フィルムは、該フィルムを介して水とグル

コース溶液とを対向して接触させた際に、測定開始後3日目(72時間)の水／グルコース溶液の濃度(Brix%)の差が4以下であることが好ましい。この濃度(Brix%)の差は、更には、3以下、より好ましくは2以下(特に1.5以下)であることが好ましい。

<フィルムの水／グルコース溶液透過試験>

市販のグルコース(ブドウ糖)を用いて5%グルコース溶液を作製する。上記塩水試験と同様の「ざるボウルセット」を使い、ざる上に試験すべきフィルム(サイズ:200~260×200~260mm)を乗せ、該フィルム上に水150gを加える。他方、ボウル側に上記のグルコース溶液150gを加え、得られた系全体を食品用ラップ(ポリ塩化ビニリデンフィルム、商品名:サランラップ、旭化成社製)で包んで、水分の蒸発を防ぐ。この状態で、常温で放置して、24hrs毎に水側、グルコース溶液側の糖度(Brix%)を糖度計で測定する。

(植物との一体化)

後述する実施例1の条件(バーミキュライト使用)で、試験を行う。すなわち、サニーレタス(本葉1枚強)を2本用いて、実施例1の液肥(原液ハイポネックス1000倍希釈液)条件で、35日間、植物の成長試験を行う。

【0031】

得られた植物-フィルムの系において、植物苗の根元で茎葉を切断する。根の密着したフィルムの茎がほぼ中心になるように、該フィルムを巾5cm(長さ:約20cm)に切断して試験片とする(図17を参照)。

【0032】

図4を参照して、ばね式手秤に市販のクリップを付け、上記で得た試験片の一方をクリップで固定して、ばね式手秤の示す重量(試験片の自重に対応=Aグラム)を記録する。次いで試験片の中心にある茎を手で持ち、下方に緩やかに引き下げて、根とフィルムが離れる(あるいは切断される)際の重量(荷重=Bグラム)をばね式手秤の目盛りから読み取る。この値から初期の重量を差し引き、得られた(B-A)グラムを巾5cmの引き剥がし荷重とする。

(フィルム材料)

上述した「根と実質的に一体化し得る」性質を満足する限り、本発明において、使用可能なフィルム材料は、特に制限されず、公知の材料から適宜選択して使用することが可能である。このような材料は、通常フィルムないし膜の形態で用いることができる。

【0033】

より具体的には、このようなフィルム材料としては、例えば、ポリビニルアルコール（PVA）、セロファン、酢酸セルロース、硝酸セルロース、エチルセルロース、ポリエステル等の親水性材料が使用可能である。

【0034】

上記フィルムの厚さも特に制限されないが、通常は、 $300\mu\text{m}$ 以下程度、更には $200\sim 5\mu\text{m}$ 程度、特に $100\sim 20\mu\text{m}$ 程度であることが好ましい。

【0035】

必要に応じて、上記フィルム4は他の材料と複合化（例えば、ラミネート化）してもよい。このような複合化は、例えば、フィルムの強度維持の点から好ましい。上記した「他の材料」としては、本発明におけるフィルム4の効果（根との実質的な一体化）を実質的に妨害しない限り特に制限されない。通常多孔質材料（例えば、不織布）、透水性および／又はイオン透過性材料等を、植物体から見てフィルム4より外側（すなわち、フィルム4より溶液側）に配置しても、本発明におけるフィルム4の効果が実質的に妨害されない場合が多い。他方、後述するように、所定の材料を植物体から見てフィルム4より内側（すなわち、フィルム4より植物側）配置しても、本発明におけるフィルム4の効果が実質的に妨害されない場合もあり得る（したがって、このような「他の材料」も使用可能である）。

【0036】

本発明のフィルム4の強度補強、取り扱い易さおよび形状保持性の向上の目的で、必要に応じて、「他の材料」と複合化する場合、このような「他の材料」としては、例えば、ポリエチレン、ポリプロピレン、ポリエチレンテレフタレート、ポリアミド、ポリビニルアルコール、セルロース等から成る不織布および連通孔を有するスポンジ等が挙げられる。該複合化の手法としては、例えば、貼り合

せ、二重容器等が挙げられる。

【0037】

更には、フィルム4の機械的強度を考慮して、該フィルム4の外側を、水透過性を有する他の材料でカバーしてもよい。該「他の材料」とフィルム4とは接触（一部接触を含む）していてもよく、また必要に応じて、互いに間隙をおいて配置してもよい。このような材料としては、例えば、金属、プラスチック、セラミック、木材等の比較的堅い材料が挙げられる。

（器具・収容部・壁材）

器具1の形状、大きさ等も特に制限されず、例えば、従来より使用されてきたような公知の栽培容器（例えば、ポット状、トレイ状、プランター状）の形状、大きさ等を、そのまま用いることができる。

【0038】

また、該器具1の収容部2の形状、大きさ、ないしは該収容部を与えるための壁材3の材質、厚さ等も、特に制限されず、育成すべき植物の水分消費量、容器の内容積、植物支持体（土壌等）の通気性、水の温度等の種々の条件を考慮して、適宜選択することが可能である。

【0039】

例えば、壁材3の材質としては、軽量化、易成形性および低コスト化の点からはポリプロピレン、ポリ塩化ビニル、ポリエチレン等の汎用プラスチックが好適に使用可能である。

（容器の形成方法）

上記構成を有する植物栽培用器具の使用方法是特に制限されないが、例えば、該容器中に植物保持用支持体および植物体を配置し、少なくとも前記フィルムを水もしくは肥料溶液に接触させつつ、該植物体を栽培すればよい。

（植物体）

本発明において栽培可能な植物（体）は、特に制限されない。本発明の栽培方法においては、植物の成長した根が、上記したフィルムと一体化した後に、該フィルムを介して接する液体からの肥料成分吸収が可能となるため、該植物は、ある程度成長した苗の状態であることが望ましい。ただし、該植物を保持すべき支

持体（ないし土壌）中に、該植物がフィルムと一体化するまでの根の成長を可能とする程度の養分および水分を含有ないし混入することにより、種子ないし発芽直後の種子であっても、本発明の栽培方法により栽培することが可能となる。

（植物保持用支持体）

本発明においては、上記の植物保持用支持体（ないし土壌）としては、従来より公知の支持体を特に制限なく使用することが可能である。このような支持体としては、例えば、土壌（礫、砂、土）、炭化物、天然鉱物質（バーミキュライト、パーライト、ゼオライト等）、天然植物質（ピートモス、パーク、水苔、ヤシガラ等）、植物育成用保水材およびこれらを配合した苗育苗用混合植込材料等が挙げられる。

（土壌）

上述したように、通常使用される土壌ないし培地は、本発明において、いずれも使用可能である。このような土壌ないし培地としては、例えば、土耕栽培に用いられる土壌、および水耕栽培に用いられる培地が挙げられる。

【0040】

例えば、無機系では天然の砂、れき、パミスサンドなど、加工品（高温焼成等）では、ロックウール、バーミキュライト、パーライト、セラミック、籾殻くん炭など。有機系では天然のピートモス、ココヤシ繊維、樹皮培地、籾殻、ニータン、ソータンなど、合成品の粒状フェノール樹脂などがある。また、これらの混合物でもよい。必要最小限の肥料および微量元素を、これらの土壌ないし培地に加えてもよい。本発明者らの知見によれば、本発明の栽培器具／栽培方法においては、植物の根が、フィルムを介して接触する養液側から吸収可能な程度に伸びるまでの養分は、ここに言う「必要最小限の肥料および微量元素」として、フィルムより内側（すなわち、植物側）に加えておくことが望ましい。

（養液）

本発明において使用可能な養液（ないし肥料溶液）は特に制限されない。例えば、従来の養液栽培ないし水耕栽培において使用されてきた液状成分は、本発明においていずれも使用可能である。

【0041】

一般には、水あるいは養液とした植物の生育にとって必要不可欠な無機成分としては、主要な成分として：窒素（N）、リン（P）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、マグネシウム（Mg）、硫黄（S）、微量成分として：鉄（Fe）、マンガン（Mn）、ホウ素（B）、銅（Cu）、亜鉛（Zn）、モリブデン（Mo）が挙げられる。さらにこの他に、副成分として、珪素（Si）、塩素（Cl）、アルミニウム（Al）、ナトリウム（Na）等がある。必要に応じて、本発明の効果を実質的に阻害しない限り、その他の生理活性物質も加えることができる。更に、グルコース（ブドウ糖）などの糖質を添加することも可能である。

（根圏温度の制御）

本発明においては、必要に応じて、フィルムを介して植物体の根と接触する液体（例えば、養液）の温度を制御することにより、該フィルムと一体化すべき（ないしは、既に一体化した）根周辺の温度、すなわち根圏温度を調節することができる。このような態様によれば、温室等の室内全体を暖房／冷房していた従来の方式と比べて、植物の根圏温度を精密に、且つ省エネルギー的にコントロールすることが容易となる。

【0042】

本発明においては、特に、植物体の根がフィルムと密着ないし一体化しているため、根圏温度の制御が特に容易である。

（栽培方法）

本発明においては、上記した構成を有する栽培器具1を使用する限り、これと組み合わせて使用すべき栽培方法は、特に制限されない。本発明において好適に使用可能な栽培方法の態様を、以下に述べる。

（好適な栽培方法）

図5の模式断面図を参照して、この態様においては、フィルムと溶液とが直接に接触している。この態様においては、溶液内部に配置したヒーターによって、該溶液を加温することもできる。また、溶液を外部で加温して循環することもできる。例えば、発泡スチロール製のトロ箱を用い、肥料溶液の上にフィルム（網目のある箱を支えにしてもよい）を置き、土壌を乗せ、苗を植え付けることがで

きる。この態様においては、肥料水溶液はフィルムによって蓋をされ、水分の蒸発は植物を通してのみ行われるので、水溶液表面から直接の蒸散を防ぐことができる。

【0043】

図6の模式断面図を参照して、この態様においては、フィルムが網状の容器を介して溶液と接触している。網状の容器は、フィルムの破損防止等のために有用である。図7(a)および(b)は、網状の容器内にフィルムを配置した例(図7(a))と、溶液中にこれらの容器を複数配置した例(図7(b))を示す。

【0044】

図8の模式断面図を参照して、この態様においては、フィルムと容器の接触面におけるサイホン効果で、溶液をフィルムと接触させる例を示す。この態様においては、溶液の種類切替の容易さなど自由度が増えるという利点がある。

【0045】

図9の模式断面図を参照して、この態様においては、不織布等の吸水マットの上にフィルムを配置することにより溶液をフィルムと接触させて供給する。例えば、フィルムとして不織布付親水性ポリエステルを用いた容器の隣に水の入った容器を置き、吸水マットのサイホン効果で土壌の容器に水を導くことができる。

【0046】

本発明においては、上記したような図5～図9の個々に示した構成の2以上を、必要に応じて組み合わせてもよい。

(本発明の利点)

上記構成を有する本発明の栽培器具ないし栽培方法を用いることにより、植物に対する酸素供給が、植物に対する養分供給から機能分離されることとなる。すなわち、従来の養液栽培の最大の問題点であった根への酸素が、空気中から充分に供給可能ある一方で、養分はフィルムを介して接触する養液から必要な程度を供給することができる。したがって、本発明においては、養液の濃度、pH等の管理に関し、従来の養液栽培におけるよりも遥かに自由度が増大する。すなわち、本発明においては、植物体がフィルムによって養液と物理的に分離されているため、実質的に、植物体とは無関係に養液を管理することが可能となる。換言す

れば、栽培途中における養液自体の交換、および／又は養液の濃度、pH等の管理が極めて容易になる。

【0047】

更に、本発明によれば、養液中の有害細菌から、植物体を隔離することが極めて容易である。加えて、フィルムを介して接触する養液からの水分供給が、植物に対しては比較的抑制されるため、糖度等の点における品質の向上も可能となる。

(養液における利点)

上述したように、植物の生育にとって必要不可欠な無機成分としては、主成分：窒素(N)、リン(P)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、マグネシウム(Mg)、硫黄(S)、微量成分として：鉄(Fe)、マンガン(Mn)、ホウ素(B)、銅(Cu)、亜鉛(Zn)、モリブデン(Mo)が挙げられる。さらにこの他に、副成分として、珪素(Si)、塩素(Cl)、アルミニウム(Al)、ナトリウム(Na)等がある。これらの成分は通常はイオンの形で供給されるが、植物の種類ごとに要求する各成分の量が異なるため、一般には、植物ごとに配合を決める必要がある。また、使用する水によっては、含まれるイオンの量も考慮した濃度の調整が必要になる場合がある。

【0048】

養液—植物体がフィルムによって分離されている本発明においては、このような養液組成の調整も、遥かに容易に行うことができる。例えば、植物体をフィルムごと第1の養液から引き上げて分離し、他の組成を有する第2の養液中に浸漬すればよい。

(養液の濃度)

養液の個々の成分濃度や全塩濃度は、作物の生育や品質に大きな影響を及ぼす。従って、養液の濃度をどの値にするかは重要な問題である。生育段階、生育環境条件によって大きく変化することが明らかになっている。

【0049】

これまで、日本では最初に調整したときの成分組成が栽培中にも変化せず、不必要なものは蓄積しないことが理想とされてきたが、ロックウール等の固形培地

では、かん液する培養液と排液の組成、濃度は必ずしも一致していない。欧州では、培地内に存在する養液をスターター養液、日々かん液する養液を追肥養液と呼び、両者を区別している。今後、栽培の各段階で、養液組成、濃度を変化させることが必要になる可能性がある。

【0050】

養液—植物体がフィルムによって分離されている本発明においては、このような養液濃度の調整も、上記した養液組成の調整と同時に、遥かに容易に行うことができる。

(pH)

養液の pH (水素イオン濃度) は植物の養分吸収によって変化するが、同時に、植物体の根による養分吸収能にも直接影響することが知られている。高 pH (アルカリ性側) 条件では P、Ca、Fe、Mn の溶解度が低い場合があり、また植物の吸収できるイオン形態でない場合もある。また、低 pH (酸性側) では Mn の過剰吸収が生じる場合がある。このことから、一般的に pH 5.5 ~ 6.5 が好適とされる。養液栽培で用いる養液の pH が変化する主な原因は、陽イオンと陰イオンの吸収の不均衡である。また、植物が硝酸態窒素 (NO_3^-) とアンモニア態窒素 (NH_4^+) のどちらを優先吸収するかによっても影響を受け、 NO_3^- が優先吸収されると pH は上昇傾向となり、 NH_4^+ が優先すると低下する。更に、根からの漏出や、根の腐敗による、酢酸、蟻酸、プロピオン酸等の有機酸の生成によっても、養液の pH が容易に変化することである。

【0051】

養液—植物体がフィルムによって分離されている本発明においては、このような養液 pH の調整も、上記した養液組成の調整と同様に、遥かに容易に行うことができる。

(酸素濃度)

一般に、植物体の育成において、酸素の供給は最も重要な条件である。特に、高温時には根の呼吸が高まって酸素要求量が増すが、一方で溶存酸素濃度は低くなるので、酸素欠乏の問題がある。酸素不足が発生すると「根づまり」と称される現象が生じ、その結果、根が腐敗し、アンモニアが発生し、養液の pH が上昇

し始める。根への酸素の供給は水耕栽培では液中の溶存酸素によるか、直接空気中の酸素に接することによって補う。液中の溶存酸素による場合には、液表面と空気層との接触によって行う自然溶存の場合と、液循環の際の瀑気や吸い込みによって行う場合に分けられる。直接空気中の酸素に接する場合は、NFTの一部の方式（養液を一次的に止め、根を空気に完全にさらす）やロックウール等で行われている。

【0052】

根の発育生態を見ると、溶存酸素のみによる場合には根毛がほとんど発達せず、環境適応幅も狭い。それに対し、空気中の酸素を利用した場合には根毛が良く発達し、環境の変化に対し順応性が高い。したがって、有機物が十分に供給された土壌の場合には土壌の団粒構造が発達しており、土壌中に空気すなわち酸素が充分含まれるため、そこで栽培した植物の根には根毛が発達しており、環境に対する適応性も高くなる。養液栽培は、この土壌で栽培した場合の良い点を取り入れる努力がなされ、かつ土壌の場合に生じる欠点を補うことを目標にしているため、特にこの酸素の供給に対しては細心の注意が払われてきた。

【0053】

養液—植物体がフィルムによって分離されている本発明においては、このような植物への酸素の供給は、空気中の酸素を有効に利用して、かつ、土壌中水分が極めて少ないため、従来の露地栽培と同等以上に、容易に行うことができる。

（高品質化のための養液管理技術—高糖度）

最近、トマトやメロン等の果菜類では、高品質化により高付加価値をつける工夫がなされている。メロンの養液栽培では、収穫前に培養液濃度を高めて果実の糖度を上げることがよく行われている。トマトでは通常、培養液濃度を高めたり、培養液に食塩を加えたり、あるいは海水を加えて浸透圧を高めて、植物体の吸水を抑制して、高糖度の果実を得ている。

【0054】

養液—植物体がフィルムによって分離されている本発明においては、植物への水の供給は比較的不足した状態であるため、高糖度等の候品質化を容易に行うことができる。

(高品質化のための養液管理技術—特定成分の低含量化)

養液—植物体がフィルムによって分離されている本発明においては、上述したように、養液組成、濃度、pH等の調整が極めて容易であるため、以下のような特定成分の調整も容易に行うことができる。

(1) 硝酸態窒素

サラダやホウレン草等の葉菜にはその可食部に葉柄部が含まれているため、高い濃度で硝酸塩が含まれていることがある。硝酸塩は唾液と反応して亜硝酸塩となり、更に消化の過程で発ガン性を持つニトロソアミンという物質を生成するとされている。このため、野菜に含まれる硝酸含量が品質の重要な基準の1つになりつつあり、その低含量化が求められている。養液管理によって植物体の硝酸態窒素含量を低下させるには、まず収穫前の数日間、硝酸態窒素の供給を停止することで可能である。

(2) シュウ酸

葉菜の中でもホウレン草は特にシュウ酸含量が高いものとして知られている。シュウ酸はア苦、えぐ味の成分であるばかりでなく、尿路結石の原因物質としても知られ、その低含量化が求められている。例えば、養液中の硝酸態窒素を減らすことでシュウ酸含量を低下させることができる（ただし、一般的には若干の生育の抑制も伴う傾向がある）

(養液栽培のデメリットの克服ないし軽減)

(1) 一般的には養液栽培においては、初期の資本投資額が大きいとされている。すなわち、養液栽培では温室・ハウスなどの園芸用施設だけでなく、養液栽培装置の設置が不可欠であり、土耕栽培と比較して初期投資額が大きくなる。しかも、養液の給液管理や環境制御等を自動化する場合には、さらに各種コントローラーへの投資が必要となる。

【0055】

これに対して、養液—植物体がフィルムによって分離されている本発明においては、フィルムと接している植物の根が同時に土耕栽培に使用されているマトリックスに接触しているため、養液等の環境変化に対する緩衝効果が発揮され、環境制御等が極めて容易となるため、施設コストを著しく軽減することが可能となる

【0056】

(2) 一般的には、養液栽培においては、ランニングコストがより多くかかるとされている。すなわち、養液栽培は土耕栽培に比べ肥料費や光熱動力費をより多く要する。また、培養液の分析、機器のメンテナンスのほか、方式によっては使用済みロックウールや廃液等の廃棄物処理に費用がかかる場合もある。

【0057】

これに対して、養液—植物体がフィルムによって分離されている本発明においては、栽培環境の簡略化により、上述した施設コストのみならずランニングコストをも著しく軽減することが可能となる。

【0058】

(3) 一般的には、養液栽培においては、培養液の管理が難しいとされている。すなわち、養液栽培の場合、土耕栽培よりも地下部の緩衝能力が小さいため、肥料成分や温度、酸素量等の影響を受けやすい。

【0059】

これに対して、養液—植物体がフィルムによって分離されている本発明においては、先に述べたように、用いられている土耕栽培用の土壌の緩衝能力により、上述した養液の管理を著しく容易化することが可能となる。

【0060】

(4) 一般的には、養液栽培においては、導入できる植物（例えば、野菜）の種類が限定されている。

【0061】

これに対して、養液—植物体がフィルムによって分離されている本発明においては、上述した酸素供給の容易化（実質的に露地栽培と同等以上の酸素供給）、および養液管理の容易化により、従来の養液栽培よりも、適用すべき植物の対象を拡大することが可能となる。

【0062】

(5) 更に、従来、有糖培養によってのみ生育可能な幼苗の栽培方法（例えば、組織培養によるクローン苗の栽培等）においては、寒天培地等にグルコース（

ブドウ糖)等を添加し、無菌的に行われてきたが、いくつかの重大な問題点がある。例えば、滅菌操作、クリーンルームの使用等の高いコストと培養段階から圃場に移行する際のグルコースを含む寒天培地の除去、水分環境の激変による活着率の低下、および苗の低品位化である。

【0063】

これに対して、養液-植物体がフィルムによって分離されている本発明においては、グルコース等の栄養成分がフィルムを介して植物に供給され、かつ酸素が充分供給され、かつフィルムによって菌による汚染が防止されるため、上述した従来の組織培養法の問題点が完全に解消される。

【0064】

以下、実施例により本発明を更に具体的に説明する。

【0065】

【実施例】

以下で用いた実験方法は、上述したものの他は、以下の通りである。

<水の蒸発量測定>

図10の模式断面図を参照して、上述した「ざるボウルセット」を使い、ざるにフィルム(200~260×200~260mm)を敷いた後に土壌を加え、植物の苗(1~2本)を植え付ける。ボウルに水あるいは所定濃度の肥料希釈液を加え、この上にざるを乗せた。定期的に上皿天秤にて重量を測定し、減量から液の蒸発量を測定した。蒸発により減量した液は随時追加した。

<成長過程の観察>

苗の成長過程の観察は、デジタル写真により撮影した(デジタルカメラ:キャノン社製 IXY Digital 200a)。

<試験終了後の観察ならびに測定>

試験終了後は、根の乗っているフィルムの裏側をフィルム越しに、あるいはフィルムを除き、根の部分を中心に写真撮影を行った。成長した苗の重量測定は、根の付いたまま、あるいは根元で切断し、茎葉部分を秤量した。

<pHの測定>

pHの測定は後述のpHメーターによって行った。標準液(pH7.0)で校

正した pH メーターのセンサー部分を測定すべき溶液につけ、本体を軽く揺らし、値が安定するのを待ち、LCD (液晶) 表示部に表示される値を読み取った。

< Brix % の測定 >

Brix % 測定は後述の糖度計 (屈折計) を用いて行った。測定溶液をスポイトでサンプリングし、糖度計のプリズム部分に滴下し測定後、LCD の値を読み取った。

< 実験器具等 >

1. 使用器具および装置

- 1) ざるボールセット: ざるの半径 6.4 cm (底面の面積約 130 cm²)
- 2) 発泡スチロール製トロ箱: サイズ 55 × 32 × 15 cm 等
- 3) 上皿電子天秤: Max. 1 Kg 株式会社タニタ
- 4) ばね式天秤: Max. 500 g 株式会社鴨下精衡所
- 5) ポストスケール: ポストマン 100 丸善社
- 6) 電気伝導度計: Twin Cond B-173 株式会社堀場製作所
- 7) pH メーター: pH パル TRANS Instruments (グンゼ産業)
- 8) 糖度計 (屈折計): PR 201 (株) アタゴ社製

2. 使用材料

(土壌)

- 1) スーパーミックス A: 水分約 70 % 微量肥料入り 株式会社サカタの種
 - 2) ロックファイバー: 栽培用粒状綿 66 R (細粒) 日東紡
- 成分 (%) SiO₂ 43、CaO 33、Al₂O₃ 15、MgO 6、
Fe₂O₃ 1 以下、MnO 1 以下

- 3) パーミキュライト: タイプ GS ニッタ株式会社

(フィルム)

- 4) ポリビニルアルコール (PVA): 40 μ アイセロ化学
- 5) 二軸延伸 PVA: ポブロン 日本合成化学工業
- 6) 親水性ポリエステル: 12 μ デュボン社

同不織布付、生地付

- 7) セロファン

8) 浸透セロファン: 横浜商事(株)

9) 微孔性ポリプロピレンフィルム: セルガードPH-35 トクヤマ

10) 不織布: シャレリア(超極細繊維不織布) 旭化成社
(苗用種)

11) サニーレタス: レッドファイヤー タキイ種苗株式会社

12) パンジー: マキシムF-1 株式会社サカタの種

(肥料)

13) 原液ハイポネックス: 株式会社ハイポネックスジャパン

全窒素量 5.0%

内アンモニア性窒素 1.95%、硝酸性窒素 0.90%

水溶性リン酸 10.0%、水溶性カリ 5.0%、水溶性苦土 0.05%

水溶性マンガン 0.001%、水溶性ほう素 0.005%

(その他)

14) 伯方の塩: 伯方塩業株式会社

100g中ナトリウム37.5g、マグネシウム110mg、カルシウム

90mg、カリウム50mg

15) ブドウ糖: ブドウ糖100 (株)イーエスNA

実施例1

(液体肥料の効果)

図10の系を用いて、ハイポネックス原液の濃度の効果を調べた。すなわち、ハイポネックス100倍希釈液、1000倍希釈液、および水(水道水)の効果を比較した。

【0066】

大きさが約20cm×20cmのフィルム(PVA)内に土壌として、バーミキュライト、またはロックファイバーを約300ml配置した。この土壌内に、植物の苗として、サニーレタス(本葉1枚強)を2本配置した。土壌および溶液毎に6種類の系を作製し、それぞれの溶液に浸漬した。この際、溶液は各300ml使用し、フィルム(PVA)内の土壌が約2cmの深さで浸かるように配置

した。実験はハウス内で行い、日照は自然のままのものとした。実験の際の気温は、約0～25℃、湿度は50～90%RH程度であった。

【0067】

水分蒸発量および溶液のEC値を、栽培開始後13日後、および35日後に測定した。35日後には、前述した「引き剥がし試験」も行った。

【0068】

上記実験条件を纏めると、以下の通りである。

1. 実験

1) フィルム: PVA40 μ m (アイセロ化学) 200×200mm

2) 苗: サニーレタス 本葉1枚強

3) 土壌: バーミキュライト (細粒)、ロックファイバー66R

4) 溶液:

水、ハイポネックス原液 100倍希釈水溶液、1000倍希釈水溶液

5) 器具: ざるとボールのセット

6) 置き場所: ハウス (温度湿度制御無し)

7) 実験方法:

ざるにフィルム (200×200mm) を介しバーミキュライト150g

(水分73%、乾燥重量40g)、ロックファイバー200g (水分79%、乾燥重量40g) を加え、苗を2本植え付ける。ボウルに水または養液を240～300g加え、ざるを乗せた。

【0069】

8) 期間: 2002.10.29～12.4

2. 上記実験により得られた結果を、下記表1に示す。

【0070】

【表1】

実験No.	1-1	1-2	1-3	2-1	2-2	2-3
フィルム	PVA40μ					
苗	サニーレタス 本葉1枚強 各2本					
土壌	パーミキュライト			ロックファイバー		
液肥希釈倍率	100倍	1000倍	水	100倍	1000倍	水
水分蒸発量 (g)						
13日目	107	105	105	124	124	114
35日目	201	201	182	221	231	209
液肥EC (dS/m)						
0日目	3.6	0.61	—	3.6	0.61	—
13日目	3.3/ 3.4	.58/ .58	—	3.3/ 3.5	.64/ .64	—
35日目	4.2	0.31	0.18	4.2	0.52	0.36
茎葉重量 (g)	5	3	<1	2	2	<1
引剥がし試験 (g)	260	160	8	25	110	3

【0071】

EC: 液肥追加前/追加後

図11～13は、本実施例で得られた栽培開始から35日目の植物体の状態を示す写真である（いずれも土壌はバーミキュライトである）。図11はフィルムを介した溶液としてハイポネックス100倍希釈液を使用した場合、図12はハイポネックス1000倍希釈液を使用した場合、図13は水（水道水）を使用した場合である。

【0072】

また、図14～16は、本実施例で得られた栽培開始から35日目のフィルムの裏側（溶液側）から見た根の状態を示す写真である（いずれも土壌はバーミキュライトである）。図14は、フィルムを介した溶液としてハイポネックス100倍希釈液を使用した場合、図15はハイポネックス1000倍希釈液を使用した場合、図16は水（水道水）を使用した場合である。

上記した表1および写真を見れば、本実施例において植物の良好な成長が得られていることが理解できよう。ハイポネックス100倍希釈液を使用した場合の方が、該1000倍希釈液を使用した場合よりも良好な成長が見られる。（表1、図11および14）。また、これらのデータ（例えば、100倍希釈－1000倍希釈－水のデータの比較）により、植物がフィルムを介した肥料溶液中から成長に必要な肥料成分を得ていることも、容易に理解できよう。

実施例2

養液とした用いた液体肥料の濃度を、ハイポネックス1000倍、2000倍、3000倍希釈とし、表2に示した項目とした以外は、実施例1と同様に実験を行った。

【0073】

「ざる」にフィルムを介し土壌200g（水分79%、乾燥重量40g）を加え、苗を2本植え付けた。ボウルに水または肥料溶液を240g加え「ざる」を乗せた。（実施期間：2002.10.30～12.4）

上記実験により得られた結果は、以下の通りである。

【0074】

【表 2】

実験 No.		1-1	1-2	1-3
実験条件	フィルム	PVA40 μ		
	苗	サニータス 本葉1枚強 各2本		
	土壌	ロックファイバー		
	液肥種類	ハイポネックス		
	液肥希釈倍率	1000倍	2000倍	3000倍
実験結果	水分蒸発量 (g)			
	12日目	103	97	98
	34日目	204	192	197
	液肥 EC (dS/m)			
	0日目	0.61	0.39	0.34
	12日目	0.6/ 0.6	0.49/ 0.47	0.52/ 0.46
	34日目	0.46	0.41	0.43
	茎葉重量 (g)	2	1	1
引剥がし試験 (g)		170	60	30

【0075】

EC: 液肥追加前/追加後

(実験結果に対する記述)

液体肥料の希釈倍率によって、植物成長の程度は実施例1と同様に濃度の濃い方が成長しており、フィルムを介して肥料成分を吸収していることが理解できる

実施例 3

(バーミキュライト／PVA液体肥料効果)

バーミキュライト／PVAの系を用いて、水とハイポネックス1000倍希釈液の効果を比較した。表3に示した以外は、実施例1と同様に実験を行った。

【0076】

「ざる」にフィルムを介し土壌235g（水分63%）を加え、苗を2本植え付けた。ボウルに水または肥料溶液を約250ml加え「ざる」を乗せた（実施期間：2002.10.22～11.25）。

【0077】

上記実験により得られた結果を纏めれば、以下の通りである。

【0078】

【表3】

実験No.		1	2
実験条件	フィルム	PVA40 μ	
	苗	サニーレタス本葉1枚強 各2本	
	土壌	バーミキュライト	
	液肥種類	ハイポネックス	
	液肥希釈倍率	1000倍	水
実験結果	水分蒸発量 (g)		
	18日目	176	163
	34日目	270	216
	液肥EC (dS/m)		
	0日目	0.50	—
	13日目	.47/ .50	—
	35日目	0.22	—
	茎葉重量 (g)	9	1
	引剥がし試験 (g) *	>100	20～30

【0079】

* EC：液肥追加前/追加後

* 引き剥がし試験：ポストスケール使用

(実験結果に対する記述)

肥料溶液のEC値は、初期0.5 dS/mに対し、最終35日目には0.22 dS/mと低下し、明らかに肥料が消費されていた(水分蒸発を考慮すると、液体肥料の消費量は、さらに大きいと思われる)。

実施例4

土壌としてバーミキュライトを用い、フィルムを黒不織布付親水性ポリエステルとし、表4に示した項目とした以外は、実施例1と同様に実験を行った。

＜バーミキュライト／不織布付親水性ポリエステル液体肥料効果＞

実験は、「ざる」にフィルムを介し土壌230g(水分76%、乾燥重量55g)を加え、苗を2本植え付けた。ボウルに水、または肥料溶液を約200g加え「ざる」を乗せた。

【0080】

上記実験により得られた結果は、以下の通りである。

【0081】

【表4】

実験No.		1	2
実験条件	フィルム	黒色不織布付親水性ポリエステル	
	苗	サニーレタス 本葉1枚強 各2本	
	土壌	バーミキュライト	
	液肥種類	ハイポネックス	
	液肥希釈倍率	1000倍	水
実験結果	水分蒸発量(g)		
	13日目	664	592
	17日目	743	651
	23日目	925	811
	29日目	1075	934
	30日目	1100	955
	根付重量(g)	15	4

【0082】

(実験結果に対する記述)

30日目における根と茎葉の重量を、肥料溶液と水と比較すると、明らかに肥

料溶液の方が大であり、肥料を吸収していることが理解できる。

実施例 5

土壌としてロックファイバー（使用量：乾燥重量 10、20、30 g）を用い、表 5 に示した項目とした以外は、実施例 1 と同様に実験を行った。

<ロックファイバー量の効果>

「ざる」にフィルムを介し土壌 50～150 g（水分 83%、乾燥重量 10、20、30 g）を加え、苗を 2 本植え付けた。ボウルに水、または肥料溶液を 290～390 g 加え「ざる」を乗せた。（期間：2002. 11. 1～12. 4）

上記実験により得られた結果は、以下の通りである。

【0083】

【表 5】

実験 No.		1	2	3
実験条件	フィルム	PVA40 μ		
	苗	サニーレタス 本葉 1.5 枚 各 2 本		
	土壌	ロックファイバー		
	液肥種類	ハイポネックス 1000 倍希釈		
	ロックファイバー量	10 g	20 g	30 g
実験結果	水分蒸発量 (g)			
	8 日目	61	68	74
	11 日目	—	83	88
	33 日目	—	158	192
	茎葉重量 (g)	0	1	2
	引き剥がし試験 (g)	—	110	140

【0084】

*引き剥がし試験：ばね式秤を使用

（実験結果に対する記述）

土壌量 10 g の場合には 10 日目で枯れ、根の成長が進む前に水分不足により枯れたと思われる。従って、適度な土壌量が極めて好ましいと考えられる。

実施例 6

（各種フィルムの差）

上記した方法で、各種フィルムに関して、水による苗の成長を観察した。フィルムとしては、PVA、二軸延伸PVA（ボブロン）、親水性ポリエステル3種の計5サンプルを用いた。

【0085】

ざるにフィルム（260×260mm）を介し土壌500mlを加え、苗を2本植え付ける。ボウルに水250mlを加え「ざる」を乗せた。期間は8月17日～9月14日である。

【0086】

【表 6】

実験 No.	1	2	3	4	5
フィルム	PVA	親水性 ポリエステル	同不織布付	同生地付	ポブロン
苗	パンジー (マキシム) 本葉 2 枚 各 2 本				
土壌	スーパーミックス A 500 ml				
溶液	水				
水分蒸発量 (g)					
14日目	190	272	572	161	200
28日目	338	529	1243	265	340
28日目本葉数	6枚	4.5	6強	3	3.5
実験条件					
実験結果					

【0087】

(実験結果に対する記述)

不織布付親水性ポリエステルの水分蒸発量が突出しているが、不織布からの蒸発が含まれているためと考えられる。

【0088】

最終苗の本葉数は、不織布付親水性ポリエステル \geq PVA $>$ 親水性ポリエステル \geq ボブロン $>$ 生地付親水性ポリエステルの順であった。これは、根の発育状況と同様の傾向であった。

実施例 7

(塩水透過試験)

前述の<フィルムの塩/水透過試験>方法に従って、各種フィルムの塩水透過試験を行った。

フィルムはPVA、ボブロン(二軸延伸PVA)、親水性ポリエステル、セロファン、セルガード、超極細繊維不織布(シャレリア)の6種である。

【0089】

上記実験により得られた結果は、以下の通りである。

【0090】

【表7】

塩水側EC (dS/m)						
日	PVA 塩水	ポブロン 塩水	親水性ポリ エステル塩水	セロファン 塩水	セルガード 塩水	不織布 塩水
0日		9	9	9	9	9
1日		6.2	8.2	5.8	5.3	4.7
2日		5.1	7.6	5.1	4.8	4.8
3日		5	7.5	5	4.8	4.9
4日		4.9	7.1	5	4.8	4.9

水側EC (dS/m)						
日	PVA 水	ポブロン 水	親水性ポリ エステル水	セロファン水	セルガード水	不織布 水
0日		0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
1日		3.7	1	4.2	0.2	3.8
2日		4.5	1.8	4.7	0.2	4.6
3日		4.8	2.2	4.7	0.2	4.8
4日		4.8	2.7	4.8	0.2	4.8

【0091】

上記データをグラフ化したものを図18に示す。

(実験結果に対する記述)

6種類のフィルムのうち、セルガードは塩水の透過が認められなかった。その他のフィルムでは、超極細繊維不織布は水と共に塩が完全に透過しているが、PVA、親水性ポリエステルおよびセロファンも比較的早く塩の透過が進んでいる。ポプロンは塩の透過速度が小さいものの、4日目には塩水系と水系とのEC値の差が4.5以内になっている。

実施例 8

(ブドウ糖透過試験)

下記の〈グルコース（ブドウ糖）透過試験〉方法に従って、各種フィルムのブドウ糖透過試験を行った。フィルムはPVA、ポプロン（二軸延伸PVA）、セロファン、浸透セロファン、セルガードの5種である。

〈グルコース（ブドウ糖）透過試験〉

前述のざるボウルセットを使用し、ボウルに5%ブドウ糖水溶液（ブドウ糖50g/水1000ml）150gを加え、ざるに200×200mmのフィルムを敷き、水150gを加えて、ボウルに乗せた。それぞれの濃度と重量の経時変化を測定した。

【0092】

〈濃度測定〉糖度計（屈折計）を用いてBrix%を測定した。Brix%はショ糖を水に溶解したときの重量%の単位で、例えば100g中に10gのショ糖が溶けている液はBrix10%となる。

【0093】

上記実験により得られた結果は、以下の通りである。

【0094】

【表 8】

Brix % の経時変化											
時間 (hrs)	PVA 水系	PVA 糖系	セロファン 水系	セロファン 糖系	浸透セロフ アン水系	浸透セロフ アン糖系	セルガー 水系	セルガー 糖系	ポブロン 水系	ポブロン 糖系	
0	0	4.9	0	0	4.9	0	4.9	0	0	4.9	
23.5	0.9	3.8	1.3	1.3	3.4	1.5	3	0	4.8	0	4.9
36.5	1.3	3.2	2	2	2.8	2.2	2.8	0	4.9	0	4.9
47.5	1.7	3.1	2.2	2.2	2.6	2.3	2.6	0	4.9	0	4.9
60.5	1.8	2.8	2.4	2.4	2.6	2.4	2.6	0	4.8	0	4.9
71.5	2.1	2.8	2.5	2.5	2.5	2.5	2.6	0	4.9	0	4.8
85	2.2	2.7	2.5	2.5	2.6	2.5	2.6	0	5	0	4.7
95.5	2.3	2.6	2.6	2.6	2.5	2.6	2.6	0	4.9	0.1	4.7
119.5	2.4	2.6	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	0	4.9	0.2	4.5

【0095】

上記データをグラフ化したものを、図19に示す。

(実験結果に対する記述)

5種類のフィルムのうち、ポブロン、セルガードを除いた、PVA、セロファンおよび浸透セロファンは実験開始から3日目程度で、ブドウ糖系と水系とのBrix値の差が1以内になり、ブドウ糖がフィルムを透過していることが判る。

実施例 9

(耐水圧試験)

JIS L1092 (B法) に準じた試験により、200 cmH₂Oの耐水圧試験を行った。

実験結果

フィルム種	耐水圧 (cmH ₂ O)
PVAフィルム (40 μm)	200 以上
二軸延伸PVA (ポブロン)	200 以上
セロファン	200 以上
親水性ポリエステル	200 以上
超極細繊維不織布	0

実施例 10

(PVAと極細繊維不織布の比較)

以下の条件で植物を栽培し、得られたフィルム (PVAフィルムおよび不織布の、植物根に接触していたもの) から根を手で引き剥がした。

<実験条件>

器具: ゴールボールセット

フィルム: PVA (200×200 mm)、

超極細繊維不織布 (アクリル系) シャレリア (旭化成社) (160×170 mm)

土壌: パーミキュライト

苗: サニーレタス

溶液: ハイポネックス 1000 倍希釈液

期間: 2002. 9. 29 ~ 10. 31

引き剥がした後のフィルムの状態を、図20~22の写真に示す。図20は不織布の裏側である。不織布の裏側に、根が突き出ていることが観察される。図2

1は、不織布の表（土壌）側であり、土壌を除いても根が残っている。このように、根がフィルムないし布の裏側に突き出た場合には、貫根という状態となり、本発明の栽培には適しない。

【0096】

これに対し、図22はPVAフィルムの裏側を示す。PVAフィルムは透明であるために、該フィルムの裏・表ともに、根が残っていないことが観察される。

実施例11

（pHの測定）

トロ箱（30×22×8cm）に300倍希釈のハイポネックス溶液（EC：1.37）を1.3L入れ、その上にPVAフィルム（48×40cm）を敷いた。PVAフィルムに土壌（スーパーミックスA）を2cmの深さを加え、サニーレタス（本葉3枚）の苗を12本植え付けた。無加温のハウス内（11月12日～12月25日）にて育て、溶液のEC値とpHを定期的に測定した。この間、上からの給水も溶液の補充も全く行っていない。

【0097】

上記実験により得られた結果は、以下の通りである。

【0098】

【表9】

日目	EC (dS/m)	pH
0	1.37	7.2
8	1.35	
15	1.34	
22	1.31	6.3
29	1.24	6.3
36	1.10	5.9
43	0.99	4.2

【0099】

図23、24に生育状況の写真を示す。図23は苗の植付け時の写真で、図24は43日目の写真である。

（実験結果に対する記述）

pHについて、0日目7.2に対し、43日目は4.2と低下している。一般に、レタスは窒素肥料のアンモニア態窒素を優先的に吸収するため、アンモニア態窒素が消費されるまで、pHが低下すると言われており、本実験結果からもアンモニア態窒素が消費されていると考えられる。EC値も経時的に低下しており、肥料の吸収を裏付けており、図23および24の比較からも苗の成長が理解できる。

【0100】

【発明の効果】

上述したように本発明によれば、植物の根と実質的に一体化し得るフィルムを有する植物栽培用器具；植物体と、該植物体の根と実質的に一体化したフィルムとを有する植物－フィルム複合体；および該植物栽培用器具を用いた植物栽培方法が提供される。

【0101】

上記構成を有する本発明の植物栽培用器具においては、植物の根と養液（肥料成分を含む液体）とが直接には接触せず、植物体に対する酸素供給と、肥料成分の供給とが好適に機能分離された状態にある。このため、本発明においては、植物が空気中の酸素を有効に利用することができ、従来の養液栽培の問題であった根に対する酸素の供給、養液の精密な管理、根からの養液の汚染あるいは養液から植物への病原菌汚染等の問題を容易に解消することができる。

【0102】

更に、本発明の植物栽培用器具を用いることにより、栽培すべき植物を水分抑制状態とすることが極めて容易となり、該植物を高品質化することもできる。

【0103】

加えて、本発明によれば、フィルムを介して接触する養液側の肥料成分ないし養分が有効に利用されるため、養液側の富栄養化を軽減しつつ、有用な植物を栽培することも可能である。例えば、湖沼等の天然の水資源に本発明の植物栽培用器具を接触させて（例えば、1個以上を浮かべて）、該湖沼等の富栄養化を軽減することが可能となる。

【図面の簡単な説明】

【図 1】

本発明の植物栽培用器具の基本的な態様の例を示す模式断面図である。

【図 2】

本発明の植物栽培用器具の他の態様例を示す模式断面図である。

【図 3】

本発明において用いるフィルム特性（水-塩水接触）測定を説明するための模式断面図である。

【図 4】

本発明に用いるフィルム特性（引き剥がし強度）測定を説明するための模式斜視図である。

【図 5】

本発明の植物栽培用器具の他の態様例を示す模式断面図である。

【図 6】

本発明の植物栽培用器具の他の態様例を示す模式断面図である。

【図 7】

本発明の植物栽培用器具の他の態様例を示す模式断面図である。

【図 8】

本発明の植物栽培用器具の他の態様例を示す模式断面図である。

【図 9】

本発明の植物栽培用器具の他の態様例を示す模式断面図である。

【図 10】

本発明において用いるフィルム特性（水蒸発量）測定を説明するための模式断面図である。

【図 11】

実施例において得られた植物の生育状態を示す写真である。

【図 12】

実施例において得られた植物の生育状態を示す写真である。

【図 13】

実施例において得られた植物の生育状態を示す写真である。

【図 1 4】

実施例において得られた植物根のフィルム上の発達状態を示す写真である。

【図 1 5】

実施例において得られた植物根のフィルム上の発達状態を示す写真である。

【図 1 6】

実施例において得られた植物根のフィルム上の発達状態を示す写真である。

【図 1 7】

本発明において用いるフィルムの特性（引き剥がし強度）測定用の試験片を示す写真である。

【図 1 8】

本発明において用いるフィルム特性（水-塩水接触）測定結果の例を示すグラフである。

【図 1 9】

本発明において用いるフィルム特性（水-ブドウ糖接触）測定結果の例を示すグラフである。

【図 2 0】

植物の根がフィルムを突き抜けた状態の例を示す写真である。

【図 2 1】

植物の根がフィルムを突き抜けた状態の例を示す写真である。

【図 2 2】

植物の根がフィルムを突き抜けない状態の例を示す写真である。

【図 2 3】

実施例において得られた植物の生育初期の状態を示す写真である。

【図 2 4】

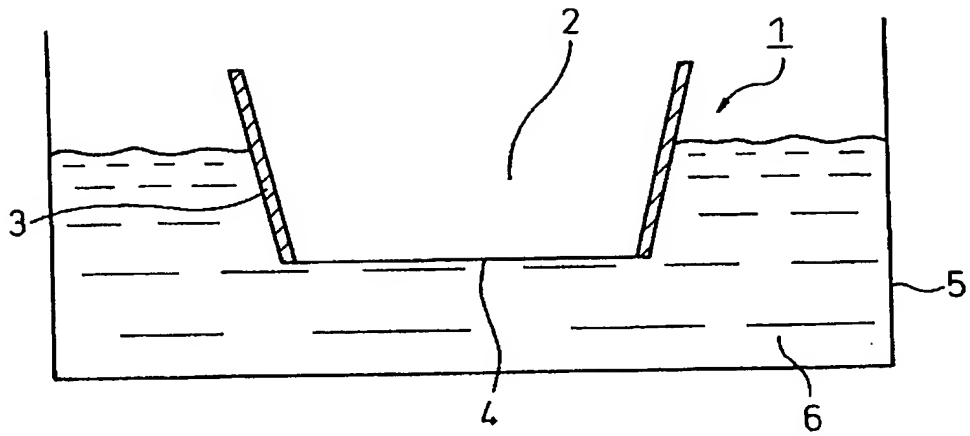
実施例において得られた植物の生育終盤の状態を示す写真である。

【書類名】

図面

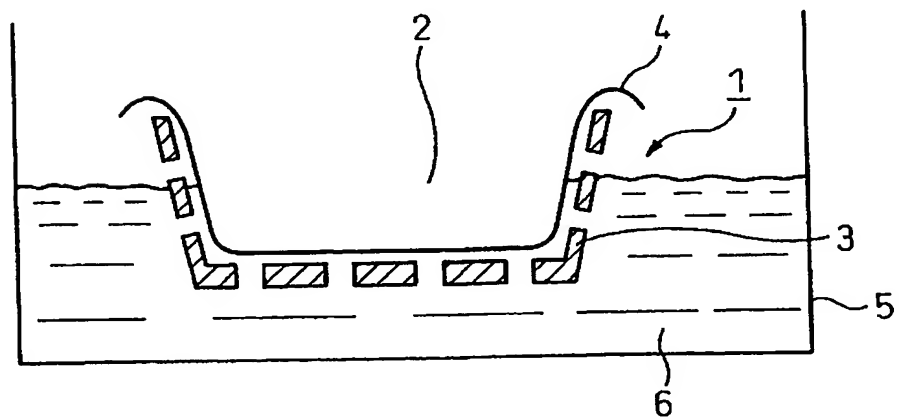
【図1】

図1



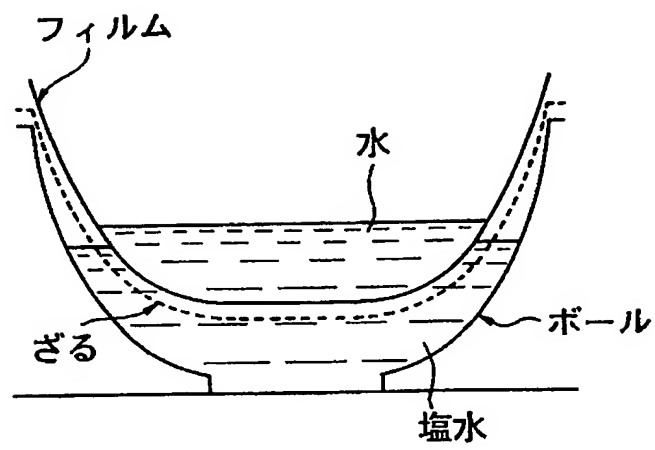
【図2】

図2



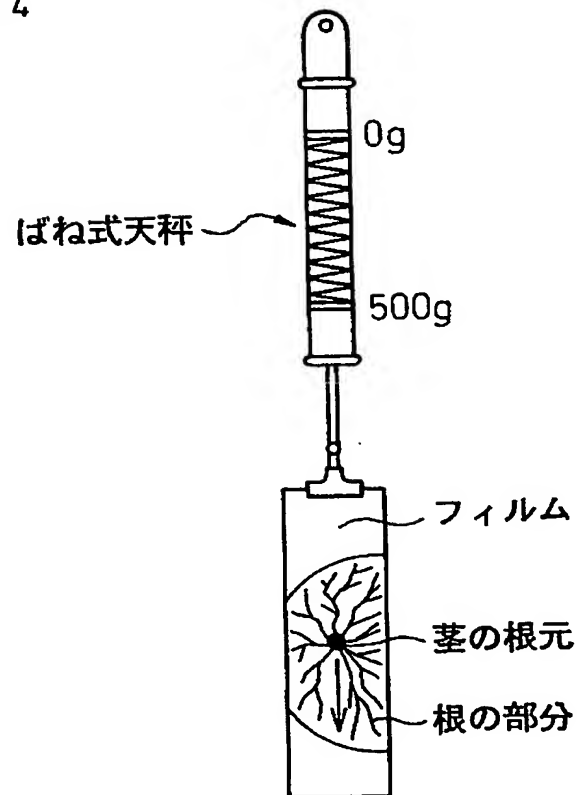
【図 3】

図 3



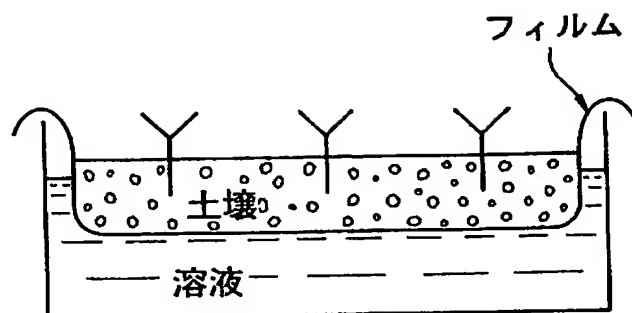
【図 4】

図 4



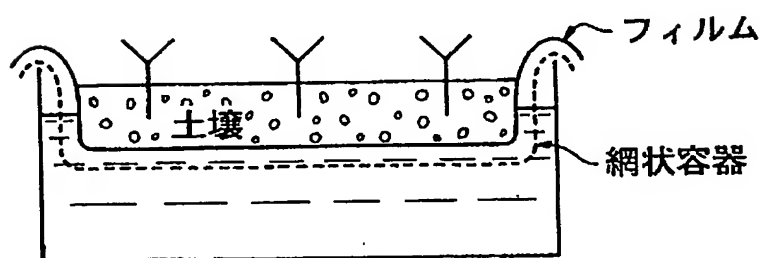
【図 5】

図 5



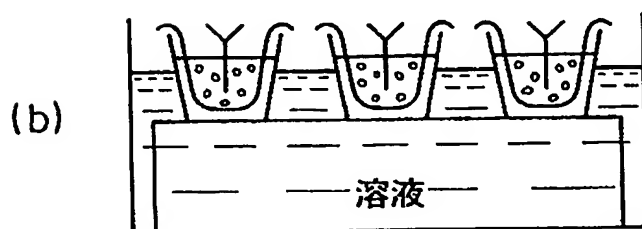
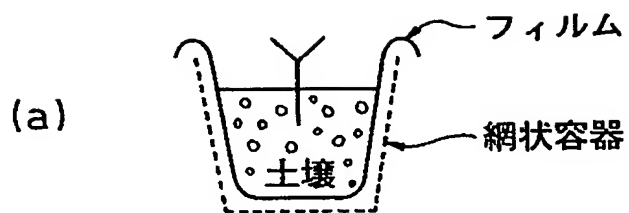
【図 6】

図 6



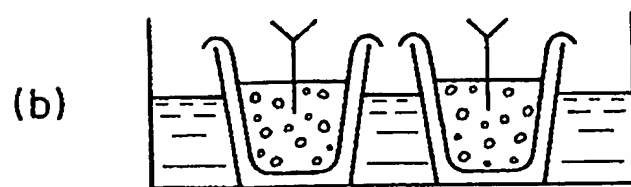
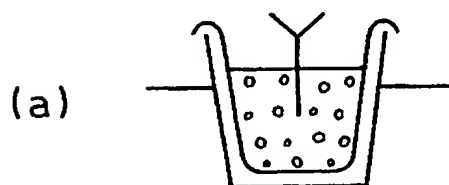
【図 7】

図 7



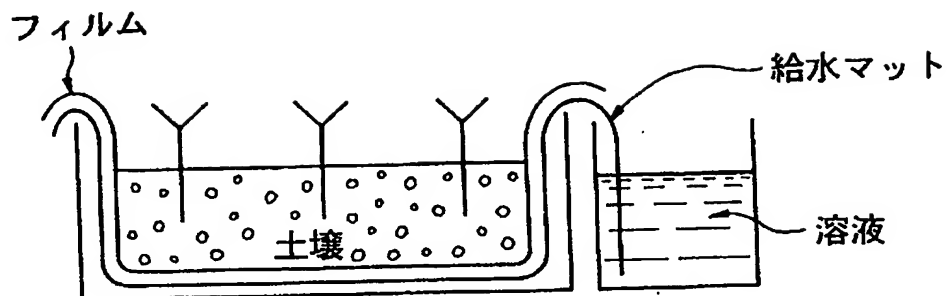
【図 8】

図 8



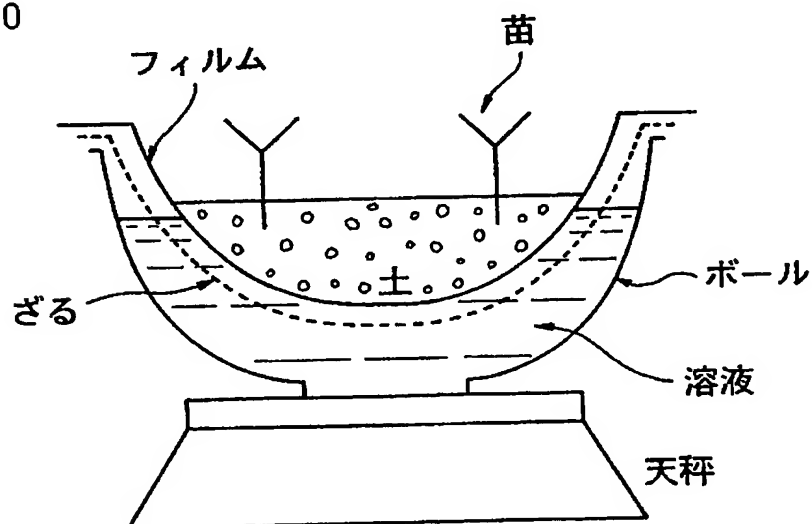
【図9】

図9



【図10】

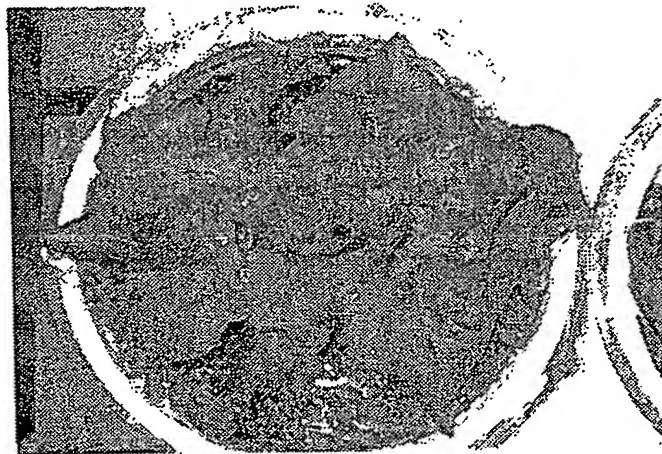
図10



【図11】

図11

パーミキュライト



ハイボネックス100倍希釈

【図12】

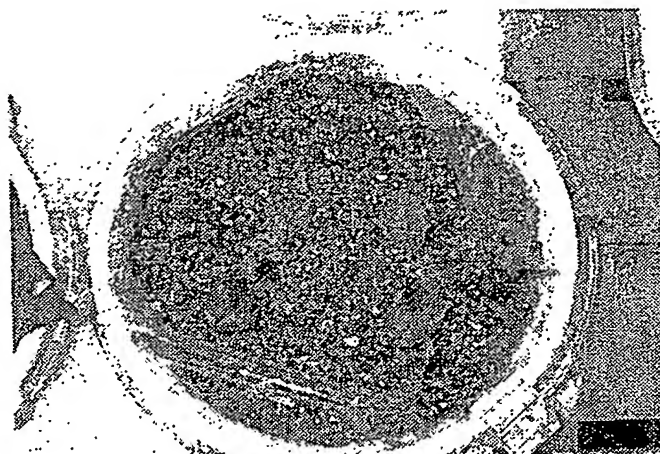
図12



ハイボネックス1000倍希釈

【図13】

図13

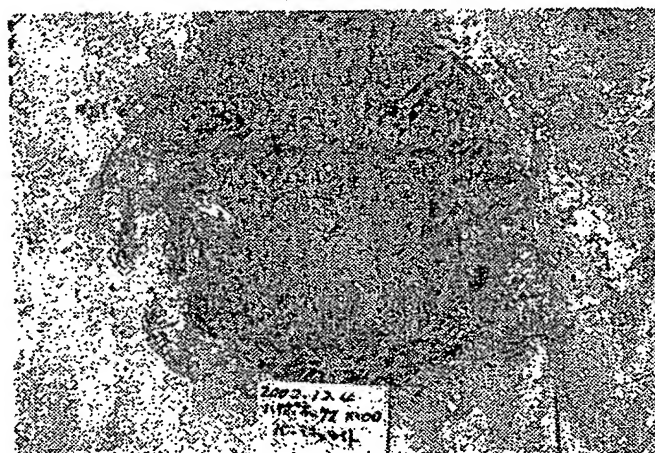


水

【図14】

図14

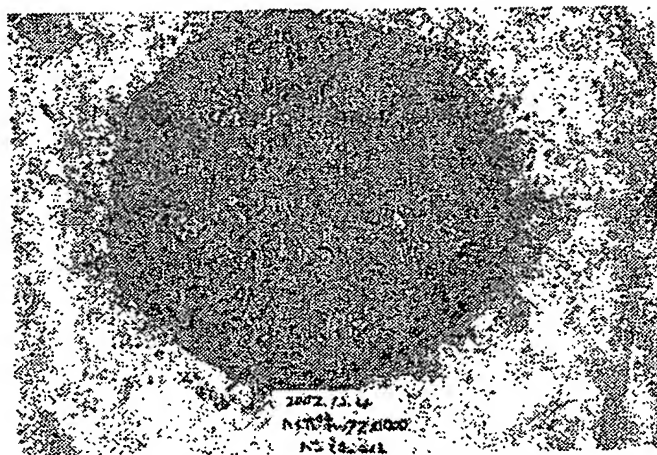
パーミキュライト(裏)



ハイポネックス100倍希釈

【図 15】

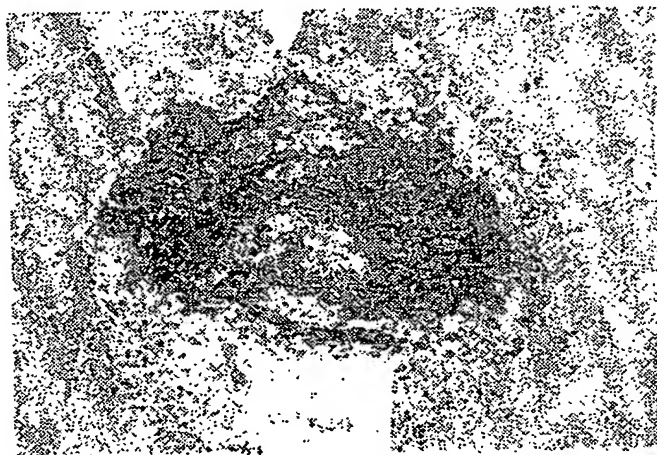
図 15



ハイポネックス1000倍希釈

【図 16】

図 16

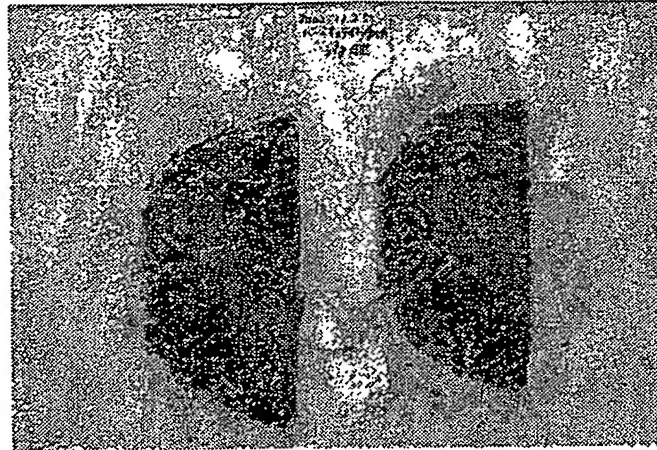


水

【図 17】

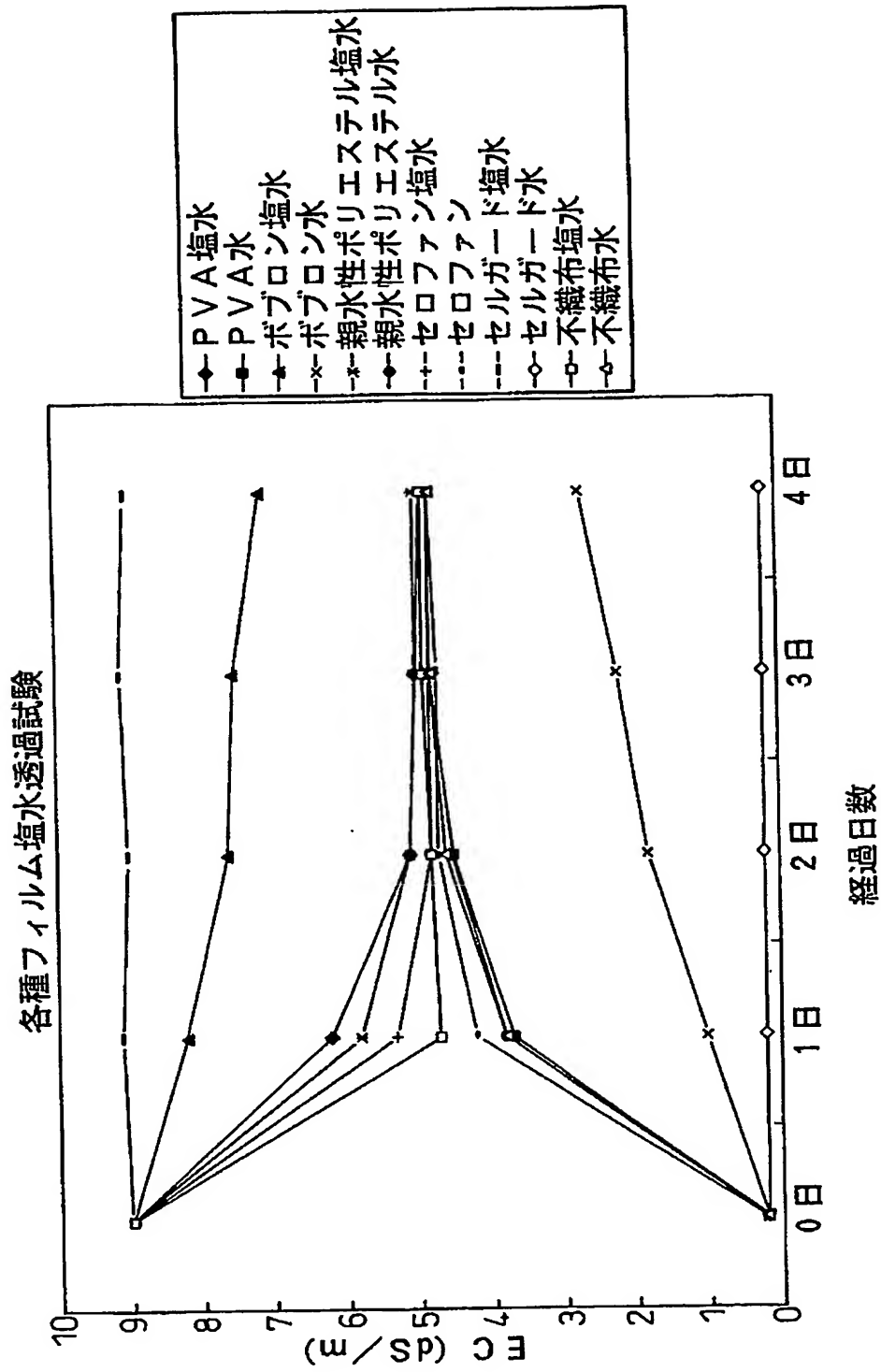
図 17

試験片



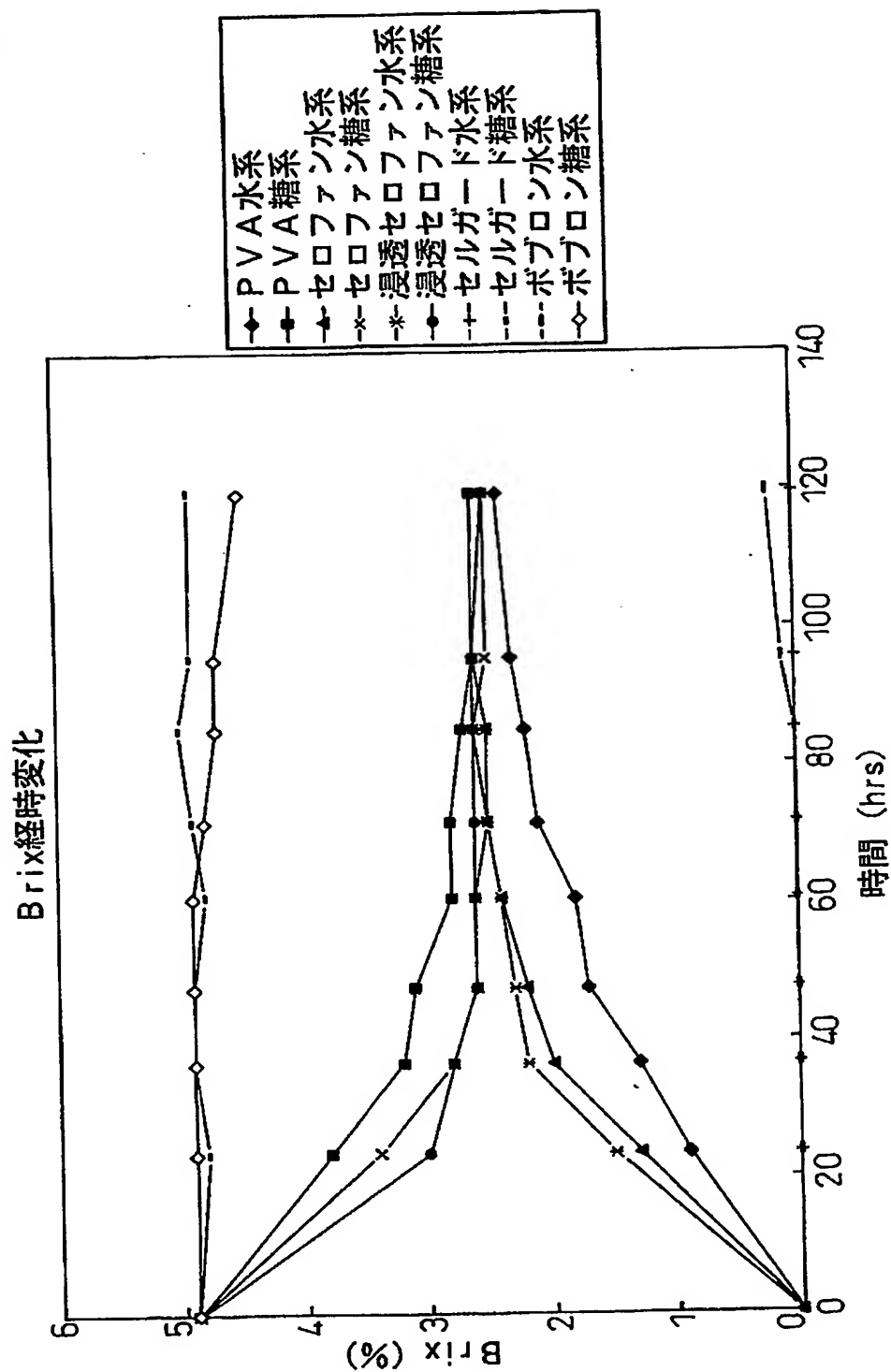
【図18】

図 18



【図 19】

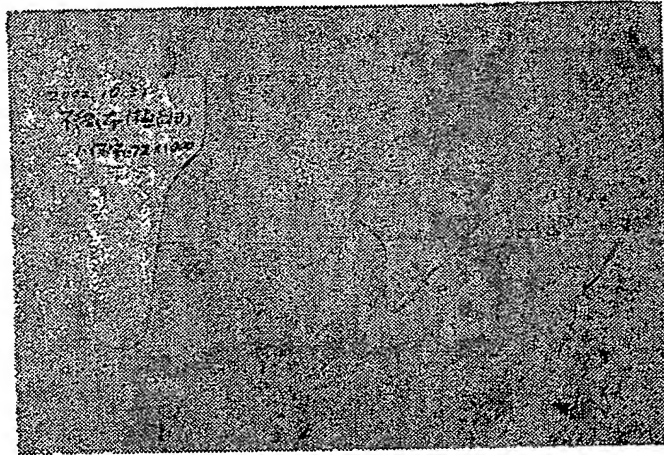
図 19



【図 20】

図 20

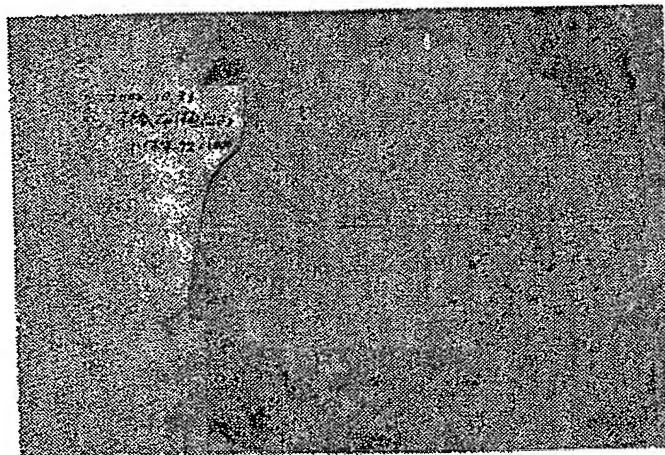
不織布 (裏側)



【図 21】

図 21

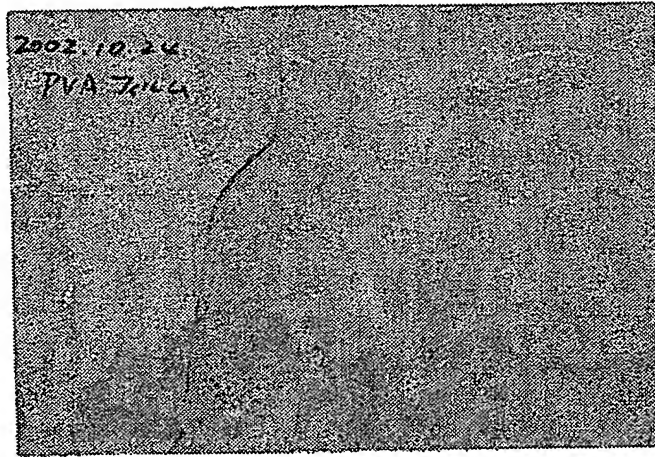
不織布 (表側)



【図22】

図22

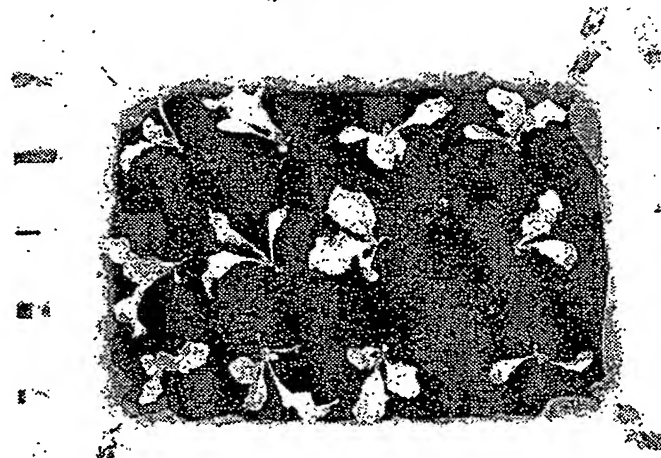
PVA(裏側)



【図23】

図23

植付け時

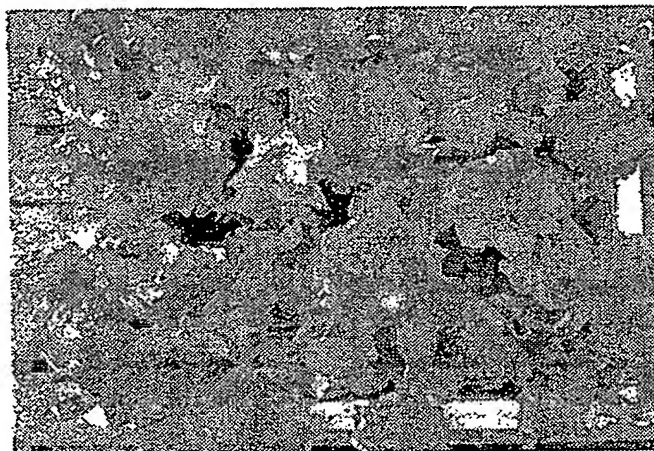


EC:1.37 pH:7.2

【図24】

図24

植付けから43日目



EC:0.99 pH:4.2

【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 根に対する酸素供給と、水および肥料成分供給との両方ともを好適に行うことを可能とする植物栽培用器具、植物－フィルムの複合体、および植物栽培方法を提供する。

【解決手段】 栽培すべき植物体を収容可能な形状を有する器具。該器具の少なくとも一部に、該植物体の根と実質的に一体化し得るフィルムが配置される。

【選択図】 図 1

特願 2003-010198

出願人履歴情報

識別番号

[395024506]

1. 変更年月日

1995年12月14日

[変更理由]

新規登録

住所

神奈川県横浜市金沢区釜利谷南 3-21-2-4

氏名

森 有一

特願 2003-010198

出願人履歴情報

識別番号

[596009814]

1. 変更年月日

2002年 1月 9日

[変更理由]

住所変更

住 所

東京都新宿区余丁町14番地4号

氏 名

メビオール株式会社

This Page is inserted by IFW Indexing and Scanning
Operations and is not part of the Official Record

BEST AVAILABLE IMAGES

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images include but are not limited to the items checked:

- ☐ BLACK BORDERS
- ☐ IMAGE CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- ☒ FADED TEXT OR DRAWING
- ☐ BLURED OR ILLEGIBLE TEXT OR DRAWING
- ☐ SKEWED/SLANTED IMAGES
- ☒ COLORED OR BLACK AND WHITE PHOTOGRAPHS
- ☐ GRAY SCALE DOCUMENTS
- ☐ LINES OR MARKS ON ORIGINAL DOCUMENT
- ☐ REPERENCE(S) OR EXHIBIT(S) SUBMITTED ARE POOR QUALITY
- ☐ OTHER: _____

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

**As rescanning documents *will not* correct images
problems checked, please do not report the
problems to the IFW Image Problem Mailbox**